

磐梯山噴火記念館

佐藤 公¹⁾

1. 磐梯山噴火記念館の開館までの経過

福島県を訪れる観光客にとって、裏磐梯の五色沼ははずせないポイントです(写真1)。しかしながら、この五色沼が1888年の磐梯山の噴火で形成されたことを知る人は、あまり多くありません。この時の噴火では477人(理科年表では461人となっていますが、当館では噴火百周年に地元自治体で調査した数字、477人というデータ(「磐梯山噴火百周年記念誌」, 編集: 磐梯山噴火百周年記念事業協議会, 1988)を使用しています)が犠牲となりました。明治以降では日本で起こった最大の火山災害ですが、この災害についても、詳しく知っている人は少ないのです。そのために、当館は、磐梯山周辺の美しい景観が形成された火山活動について学ぶ場として、噴火百周年の1988(昭和63)年4月15日に、株式会社ゴールドハウス目黒によって開館しました(写真2)。

今年で16年目になりますが、これまでに230万人を超える来館者を受け入れています。



写真1 五色沼と磐梯山。

2. 1888(明治21)年の磐梯山の噴火

磐梯山は福島県の中央に位置する猪苗代湖の北側にあり(37°36'N, 140°05'E), 北北東に吾妻火山群, ほぼ東に安達太良火山群があります。磐梯火山は約90万年前に活動を開始し(中村, 2002), 最後の噴火活動が, 1888(明治21)年7月15日でした。この時の水蒸気爆発と岩屑なだれにより, 小磐梯の山頂部が失われ, 北に開いた馬蹄形の爆裂火口が形成されました。

この時代は明治中期で, 科学的な調査が行われる条件が整いはじめていた時でした。当時の理科大学(現在の東大理学部)教授の関谷清景が菊地安とともに調査に入り, その報告を「帝国大学紀要」に詳しく掲載しました(Sekiya and Kikuchi, 1890. 第1図)。

磐梯山のこの噴火は爆発性の強い水蒸気爆発型の典型例として, 磐梯山型(Bandaian type)噴火として内外の火山学者に周知されるようになりました。



写真2 磐梯山噴火記念館。

1) 磐梯山噴火記念館副館長:

〒969-2701 福島県耶麻郡北塩原村松原字剣ヶ峯1093-36

キーワード: 磐梯山噴火記念館, 観察会, 出前授業, 火山学習会



第1図 北側から見た磐梯山の1888年の噴火口. 帝国大学紀要から.

磐梯山が噴火した明治時代中期は、交通や新聞報道の発達転換期で、その被害の様子が短期間のうちに全国に報道され、多くの義捐金が集まったことでも有名です(福島県, 1888)。日本という国が本当の意味で一つの国になろうとしていた時代だったのででしょう。

3. 当館の利用状況

現在、当館は年間10万人前後の来館者がありますが、その約36%が高校生以下の児童生徒ですが、その中の4分の3が修学旅行や林間学校などの学校行事での利用者です(写真3)。その学校団体の中の3分の2が小学生です。地域別にみますと、茨城県と東京都が多く、次に埼玉県、宮城県、新潟県、と続きます。したがって、来館者の大部分は関東地方、東北南部と一部の中部地方の方々となります。



写真3 磐梯山噴火記念館を訪れた児童生徒.

季節的には、一般客は夏休みが一番多く、学校団体入館者の3分の2が5月～7月の時期に、残りが9月、10月に利用しています。12月から3月の冬期間の利用は多くありません。

外国からの来館者は年間千人ほどで、その多くは台湾からの個人客で、それ以外としては中国や欧米からの方となります。

4. 来館者の反応

当館で来館者の注目を集めるのは、導入部にあります「磐梯山の大爆発」のコーナーです。こちらでは、1200分の1の磐梯山の地形模型、大型映像と床に埋め込んだボディソニックとで、3分間の噴火の疑似体験をします(写真4)。最初の朝のシーンと共に床が揺れ始めます。まずここで来館者は驚きますが、その後の噴火のシーンでは、手前にあ



写真4 1200分の1の磐梯山の地形模型.



写真5 火山灰が付着した杉の枝.

る小磐梯の模型がいつのまにか沈み込んで、大きな爆裂火口となります。ここでまた来館者は驚きます。映像は残念ながら磐梯山のものでなく、海外の火山の実写映像を使用しています。このコーナーで、まず来館者は衝撃を受け次へ進んでいきます。

1階に噴火前と噴火後の地図を並べて展示していますが、先の噴火の疑似体験と合わせて、裏磐梯の地形が1888年の噴火で形成されたことを来館者は理解します。多くの来館者が、「明治時代に磐梯山で大きな噴火があり、多数の犠牲者を出したことと合わせて、裏磐梯の美しい景観もその際に作られた」という感想を最後に受付で話されますので、当館の設立目的が理解されているものと考えています。

噴火に関わる実物資料としては、火山灰が付着した杉の枝があります。これは磐梯山の南側の猪苗代町で発見されたものですが、桐の箱にきちんと保存されていたために、現在も見ることができます(写真5)。



写真6 磐梯山噴火火口周辺写真.

昨年、国立科学博物館で発見された、磐梯山の噴火口周辺で撮影された写真も、2004年度から常設で展示しています(写真6)。現在、1888年に撮影された磐梯山の写真100点余りのデータベースを構築中です。また、噴火のあった明治時代の中期は、写真を直接新聞に印刷することができなかつたため、錦絵で噴火の恐ろしさを伝える手法がとられました。当館にもその錦絵が3点展示されています(写真7)。



写真7 錦絵「磐梯山噴火の図」(井上探景作).



写真8 中国で作られた地動儀.



写真9 「世界の昆虫展」ポスター.

2階の展示室には、気象観測機器類が展示され、その中では、西暦100年代に世界で初めて中国で作られた地動儀という地震計の模型が注目を浴びています(写真8)。この頃の日本は、まだ米を作るのがやつの時代であったのに比べて、中国では既に地震計という高度な機械を作成していたという、その文明の差を痛感させられたという声を入館者からよく聞きます。

企画展示室では季節ごとに企画展を開催していますが、美しい裏磐梯の写真展が中心です。道路沿いからでは見られないその美しい風景に感動される方も多いようです。夏休み時期は毎年「世界の昆虫展」ということで、収集しています蝶類と甲虫類400頭あまりを展示します。こちらは、子どもたちには非常に好評です(写真9)。

過去には2回ほど火山関係の企画展も開催しています。1998年の10周年には「磐梯山の怒り1888」を開催し(写真10)、磐梯山の過去・現在・未来及び火山災害とその対策についても紹介しました(佐藤, 1998)。1888年噴火前の磐梯山については、翁島岩屑なだれの地層はぎ取り断面を展示するとともに、江戸から明治にかけての時代に描かれた磐梯山を紹介しました。また、災害の様子を描いたジョルジュ・ビゴーや、噴火の様子を描いた山本芳翠の作品を展示しました。復興にかける夢では、裏磐梯の復興に立ち上がった人々を紹介しました。火山列島日本では、火山災害の要因や火山噴火予



写真10 「磐梯山の怒り1888」ポスター.

知について解説し、全国の火山ハザードマップや雲仙普賢岳の火砕流で被災した消防自動車のナンバープレートなどを展示しました。

2003年の15周年には「アフリカの火山」を開催し、ニイラゴンゴ火山を中心とする火山噴火と人々の生活の様子を紹介しました(佐藤, 2003)。特にこの企画展では、日本の大学で学んだ現地の学者の優れた研究調査により、噴火予知が成功したことを来館者が知り、深い感動を呼びました(写



写真11 「アフリカの火山」展示風景。



写真13 火山観察会。



写真12 自然観察会。



写真14 出前授業。

真11). この企画展は当館で春に開催した後、夏には阿蘇火山博物館でも開催され、2004年の夏には、雲仙岳災害記念館でも開催されました。

5. 当館の館外活動

5.1 観察会

年に12回程度、館外に出て観察会を実施しています。

a.自然観察会(6回程度)

裏磐梯周辺の多様性に富んだ美しい自然や動植物を中心に紹介しています(写真12)。

b.火山観察会(4回程度)

福島県内には多くの活火山があり、それらをよく理解することが地域の火山防災にもつながるという趣旨で、磐梯山をはじめ吾妻山や安達太良山などで実施しています(写真13)。

c.昆虫観察会(2回程度)

夏の「世界の昆虫展」に合わせて、裏磐梯に生息

している昆虫を紹介し、合わせてクラフト作りなども指導します(2004年度から実施予定)。

5.2 出前授業

地元の裏磐梯中学校で、火山と防災の授業を担当しています。火山の授業では、実験も取り入れ興味をもたせながら火山について学んでもらいたいと工夫をこらしています(写真14)。また、磐梯山の1888年崩壊地内にある銅沼あかぬまに出かけ、火山フィールド体験も行っています(写真15)。

防災の授業では、2001年に地元の火山防災連絡会議が作成した磐梯山火山防災マップを使い、様々な火山災害要因についてビデオ「火山災害を知る」や「火山災害の軽減」も上映し、火山観測や防災グッズ、災害用伝言ダイヤルなどについても紹介しています(写真16)。

ほかに修学旅行や林間学校の子どもたちにも宿泊先などへ出かけ講義を行っています(写真17)。



写真15 火山フィールド体験.



写真17 講義.



写真16 出前授業.



写真18 火山学習会.

5.3 火山学習会

福島県には6つ(磐梯山・吾妻山・安達太良山・那須岳・沼沢・燧ヶ岳)の活火山がありますが、火山防災の訓練はあまり行われず、防災教育としての講演会も今までに2回実施しただけです。2000年8月16日に磐梯山で臨時火山情報が発表された際には、入山規制までは比較的迅速な対応ができましたが、その解除は町村長が登山できたので安全などと、科学的な裏付けもしないまま行われました。町村を指導すべき県も火山に関する認識が充分であったとは思われず、適切なきちんとした指導をすることができませんでした。

そこで、当館の佐藤学芸員と読売新聞の前福島支局長の小林氏が発起人となり、火山防災に携わる行政担当者、ライフライン関係者、報道関係者などを集めて、火山防災意識の向上を目的として火山学習会を発足させ、これまで10回ほど福島市で学習会を開催しています(写真18)。この間、3ヶ所の活火山(磐梯山・吾妻山・安達太良山)では、

各地域の火山防災連絡会議によって、火山防災マップも公表され、各地域で避難訓練も1度実施されています。火山防災講演会も数度開催され、少しずつ火山防災の活動は前進しています。

6. インターネットを使った活動

当館では、1998年7月15日にホームページを独自で開設し、2004年4月末現在、30万件を超えるアクセス数があります。毎日更新する「今日の磐梯山」をはじめ、常設展示、企画展示、観察会という館内の事業に留まらず、福島県の火山に関する情報や福島県内の博物館の企画展情報、児童向けの火山のページなども作成しています。子どもたちからの火山に関する質問を受け、適切に答えることにより、火山の理解を深めてもらうお手伝いもしています。

2000年に有珠山が噴火した際には「今日の有珠山」というページを作り、三松正夫記念館の三松館

長からの電話取材により、毎日情報を送りました。また、阿蘇火山博物館が存続の危機に瀕した時には「阿蘇火山博物館の存続に向けて」というページを作成し、全国に阿蘇の情報を発信しました。当館は観光地とはいえ、人里離れた山中に建っている立地条件ではありますが、今後もインターネットを有効に活用しながら、タイムリーな情報を発信していきたいと考えています。

7. 今後の課題

昨年春には私たち火山系の博物館の先がけである大涌谷自然科学館が閉館し、また阿蘇火山博物館が親会社の関係で存続が危ぶまれたりと、火山系の博物館にとっては厳しい状況にあります。火山系博物館の立地が基本的に観光地であるため、開館当初は多くの来館者が見込めますが、一定の時期が過ぎると開館当時の半分程度に減少するところが多いようです。

今後は、火山系の博物館の連携を強め、昨年「アフリカの火山」展のように、一つの企画展を分担して作り、出費を抑えながら、様々な方法で火山に関する情報を発信し、日本に住む人々に火山のすばらしさと恐ろしさを伝えていきたいと考えています。

全国火山系博物館連絡協議会では、2005年度の秋から「三宅島 過去・現在・未来」という企画展を、当館・阿蘇火山博物館・雲仙岳災害記念館・立山カルデラ砂防博物館・伊豆大島火山博物館の5館で巡回展として開催することにしました。「過去」として三宅島の噴火史、「現在」として2000年噴火と島民避難、そして島民帰島、「未来」として三宅島の美しい自然を紹介する予定です。多くの方々のご来館をお待ちしています。

磐梯山噴火記念館

休館日 無休

開館時間 8:00～17:00

冬季(12月～3月) 9:00～16:00

入館料 大人 600円

(消費税込み)

中高生 500円

小学生 400円

団体料金 大人 550円

(30名以上)

中高生 450円

小学生 350円

所在地 〒969-2701

福島県耶麻郡北塩原村松原字剣ヶ峯1093-36

TEL:0241-32-2888

FAX:0241-32-3281

URL: <http://www.bandaimuse.jp/>

E-mail: master@bandaimuse.jp

【車】磐越道「猪苗代磐梯高原IC」より北へ約18km約20分

【バス】磐越西線「猪苗代駅」から磐梯高原行き約30分

文 献

磐梯山噴火百周年記念事業協議会(1988): 磐梯山噴火百周年記念誌. 磐梯山噴火百周年記念事業協議会, 35-65.

福島県(1888): 福島県庁文書. 福島県, 1507-1513.

中村洋一(2002): 磐梯火山の活動史と火山防災マップ. 2002年火山学会公開講座, 2p.

佐藤 公(1998): 磐梯山の怒り. 磐梯山噴火記念館, 1-32.

佐藤 公(2003): アフリカの火山. 磐梯山噴火記念館, 1-13.

Sekiya, S. and Kikuchi, Y. (1890): The eruption of Bandai-san. J. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo, 13, 2, 91-172.

SATO Hiroshi (2004): Museum of the Mount Bandai Eruption.

< 受付: 2004年2月18日 >